

# 耕作放棄地を牛の放牧で生き返らす

大分県豊後高田市

2014年11月26日  
NHK テレビ

大分県豊後高田市の(有)富貴茶園の永松英治さん(65)は、茶と、省労力となる繁殖 和牛の**放牧**を組み合わせた複合経営を実現している。**耕作放棄地**を再生した牧草地で周年 **放牧**し、牛舎も使わない飼育方法で、今年開催の第1回全国自給飼料生産コンクールで農林大臣賞を受賞した。茶の農繁期は収穫期の5~7月、牛は給餌の必要のある12月下旬~4月で年間通しての雇用もできる。耕作放棄地の解消と繁殖雌牛の増殖といった課題に応える経営形態として注目を集めている。

標高約350mの山間地、3か所の茶園(14ヘクタール)と5ヘクタールと17ヘクタールの2か所の放牧地がある。

永松さんは茶の栽培・販売に加え、耕作放棄地の茶畑跡を牛の放牧に使った。

数十年も荒れ果てた茶園や耕作放棄地はほとんど雑木林と竹林になっていた。

繁殖雌牛3頭を飼ってみたところ、効果はてきめん。

荒廃地が緑の牧草地に生まれ変わった。

飼料もほとんど与える必要がなく、現在は26頭の繁殖牛を飼っているが将来は100頭の増頭を考えている。

## 現在の経営状況

■労働力…… 本人と妻、常用雇用2人、非常用雇用2人

## ■経営規模

☆ 茶……… 14ヘクタール

☆ 繁殖和牛……… 26頭

(牧草地 5ヘクタール、17ヘクタール)

☆ 売上高………約5200万円

牛を牛舎で飼育するより放牧にした結果、

■農耕放棄地が緑の牧草地にか変わった。

■牛は自然放牧でストレスがなく、皆元気

■牛は起伏のある土地を動き、贅肉のない良質な牛に育つ

■糞は肥料になる

■子牛の出荷までの費用は従来の三分の一の費用

■子牛は9か月育て、市場にだす。

17頭出荷して900万円収入があった。

30頭の牛を持てば生活できる。

施設は給餌場、太陽光発電の電気棚、雨水利用の給水場、岩塩だけ。

給餌場は廃材などで作ったため、費用はほとんどかかっていない。分娩も放牧地で自然分娩。牛は放牧しておけば3か月ほどで発情する。粗飼料自給率は約80%。12月下旬~4月は購入した地元の稲発酵粗飼料(ホールクロップサイレージ WCS)を使うため国産100%。子牛1頭生産するための飼料代は親子合計で約8万9千円で全国平均約19万円(12年度農水省統計)の半分以下。

繁殖雌牛を導入したのは2006年、放牧になれた牛を無料で借り入れて(レンタカウ制度の利用)の耕作放棄地の解消を目指した。

放牧は複合に敵視、儲けもでる。

そのうえ、耕作放棄地の解消、繁殖牛不足につながります。

これからもっと広がっていく方法だと思う…とっている。